

氏 名（本籍）	とまる 丸 けい子（群馬県）		
学 位 の 種 類	博 士（教育学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4367 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	中学校教師の生徒との関係における悩みと成長・発達に関する研究		
主 査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄 司 一 子
副 査	筑波大学教授	Ph. D.	石 隈 利 紀
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	茂 呂 雄 二
副 査	筑波大学助教授	博士（文学）	岡 本 智 周

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目 的）

本論文は、教師の生徒との関係における悩みをとりあげ、これがどのように教師の成長と発達につながるのかを検討しようとした論文である。

教師のストレスや悩みは深刻の状況であり、この中でも生徒との人間関係に起因するものは、生徒への影響を鑑みても看過できない。一方で、そうした生徒との関係における悩みは教師の成長・発達を促す要因であることも指摘されている。本研究では中学校教師の生徒との関係における悩みとその悩みを契機とした変容との関連性を諸側面から把握し、生徒との関係における悩みへの援助について、具体的かつ実証的な検討を加えることを目的とした。

第Ⅰ部（第1章～第2章）では、先行研究の問題点を指摘した。中学校教師の生徒との関係における悩みとその経験を契機とした成長・発達との関連を明らかにするため、以下の目的が設定された。①生徒との関係における悩みの内容と構造を検討すること、②悩みとその悩み経験後の生徒への見方・接し方の変容との関連を検討すること、③悩み経験後の変容に関連する要因を検討すること、④悩みのプロセス的な側面を検討すること、⑤悩みを契機とした教師の成長・発達のプロセス的な側面を検討すること、⑥悩みの発生から悩みを契機とした変容までのプロセスを検討すること、⑦教師支援という観点から過去の悩み経験を他者に語ることの意義を検討すること、である。

（方 法）

これらの目的を、第Ⅱ部および第Ⅲ部において実証的に検討した。具体的には、第Ⅱ部（第3章～第5章）では、目的①～③を検討し、成長・発達の可能性を孕んだものとして、中学校教師の生徒との関係における悩みとその悩みを契機とした生徒への見方・接し方の変化の関係の量的側面に注目した。調査研究の対象者はそれぞれ 300 名～500 名の中学校教師であった。第Ⅲ部（第6章～第10章）では、目的④～⑦を検討するために、中学校教師の生徒との関係における悩みの発生から変容に至る過程の質的側面の検討が行われた。対象教師は、事例検討を含め 12 名、面接時間は、一人一回 1 時間から 2 時間ほどであった。最後に第Ⅳ部

において、本研究の結論と教師支援への展望および今後の課題について述べた。

(結果と考察)

本研究の結果得られた知見は以下の三点である。第一に、中学校教師にとって、生徒との関係で悩む経験がメンタルヘルスの悪化というネガティブな側面だけでなく、成長・発達の契機となりうるポジティブな側面を有すること、第二に、類似した事象において、悩む教師と悩まない教師の相違が明らかにされたこと、第三に、悩み事象を経験することによって、成長・発達の契機となる教師は、どのような過程を経て成長・発達に至るかを明らかにできたこと、である。

最後に本研究から得られた結果を踏まえ、教師への具体的な支援が提示された。第一に、生徒との関係における悩みの発生する可能性の高い、教師の内的要因や外的要因に配慮すること、第二に内的・外的要因を踏まえた上で、悩むことは教育実践を重ねる中で自ずと生じうるという共通認識を持つこと、第三に、悩みを意識化した教師が悩みを抱えていく上で、心の安定の確保ができるよう支えること、第四に、過去の悩み経験を振り返り、他者に語ることの意義とその可能性を支援すること、である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、生徒との関係に悩みを抱えた中学校教師に対して、質問紙調査による量的検討、面接による質的検討を加え、悩みが教師にどのような影響を与え、成長と発達につながるのかを検討した研究である。量的研究では、生徒の悩みの内容、構造、経験年数によってそれが変化することが実証的に示された。また質的研究では教師の悩みが発生する過程から悩みを抱えて変容に至る過程が、面接調査から詳細に描き出された。

本研究から、教師の抱える悩みが多角的に検討されただけでなく、悩みが発生してから教師の認知的・行動的変容に至る過程が詳細に検討され、図式化・モデル化された。これまで教師の悩みは、教師のメンタルヘルスへの影響、休職や離職との関連などネガティブな影響を及ぼすものととらえられてきたが、教師の成長やキャリア発達につながるポジティブな側面を有することが示され、悩みを語ることの意義が示されたこと、この結果に基づき教師支援の可能性を示したことが、本研究の学術的貢献として高く評価された。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。